

英語のファーストネームに関する考察と 英語語彙教育への提言

大 高 博 美¹⁾
杉 浦 香 織²⁾

1. はじめに

日本の現行の英語教育においては、固有名詞としての名前（ファーストネーム）の学習はあまり重要視されていない。教育の過程で提示すべき語彙の優先順位において、普通名詞や動詞、機能語などは名前より先に来るべきとの考え方が浸透しているからであろう。結果、中学や高校で使われる英語のテキスト類では、愛称と正称の区別なく、John や Sue などの限られた数の単音節名が終始繰り返し使われることになる。そこには、学習者が文法習得に集中できるようになるべく新出の固有名詞の数を制限したいとの教育者側の思惑が読み取れる。この配慮は、ある意味で首肯できる。特に、英語を初習する中学では必要な手段かもしれない。しかし、では名前の教育はその後の英語教育においてもまったく必要ないのかと言えば、そうではない。なるべくたくさんのお名前を知っておくことは、コミュニケーション上、極めて有用だからである。例えば初対面の人と会話する際、冒頭で必ず相手から名前を告げられるが、それが既知のものでない場合、外国語音というものはなかなか覚えられないものである。読者の中にも、覚えたはずの相手の名前がしばらく経つうちにすっかり思い出せなくなったという経験をした者がいるであろう。これに対

1) 関西学院大学経済学部教授

2) 関西学院大学大学院言語コミュニケーション文化研究科博士後期課程3年

エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

し、聞いた名前が音声的に既知のものであれば、相手の名前を呼称として随時使用することで、より相手に親しみの感情を示しながら会話を続けることができる。また、相手の名前を正しく覚えておくことは、その後の関係を保つ上でも重要である。よって、上述の教育する側からの「配慮」は、案外、百害あって一利無しなのである。本稿の目的は大きく二つに分かれる。まず一つ目は、英語圏で人気のある名前を多角的に考察することである。結果として、名前の人気というものは様々な要因、例えば時代や地域（国）や文化上の違い、あるいはまた音そのものがもつ響きに対する嗜好上の違いなどによって変異しうるということを述べる。二つ目の目的は、英語語彙教育の一環としてできるだけ多くの名前をテキストで使用（紹介）すれば少なからぬ受動的学習効果が期待できるということを主張することにある。後者の目的のために、二つの調査を行った。日本人大学生の英語名に関する知識を調べる調査と日本で現在使用されている英語のテキスト（高校・大学生用に書かれた教科書や参考書など）が実際にどのような名前を使っているかを知る調査である。これらの調査結果を踏まえて、結論として、名前教育をも射程に入れた教科書作りの必要性について述べる。

2. 英語の名前に関する考察

2.1 時代によって変化する人気度の高い名前

2006年12月21日付けの複数の新聞紙上で、この年に日本で生まれた子供たちにつけられた名前の中で最も多かった名前が公表された（明治安田生命保険発表）。因みに男女の上位3位までを挙げると、男が「陸」（リク）、「大翔」（ヒロト）、「大輝」（ダイキ）の順で、女が「陽菜」（ヒナ）、「美羽」（ミウ）、「美咲」（ミサキ）の順であった。後にも詳述するが、現代の命名法では音感が重要視され（例えば男児名には /t/, /k/ の閉鎖音、女児名には /m/, /n/ の鼻音が好まれる）、結果的に、現在人気の名前は、上の例からも分かるように「～太郎」や「～子」などの伝統的な名前とは大きく異なるものとなっている。

以上から、新生児につけられる名前の人気は時代と共に変遷するということが分かる。この点は、英語圏でも同様である。表1はアメリカ合衆国において1880年と2005年につけられた名前のベスト10を男女別に示している。1880年代の命名の特徴として、イギリス歴代国王や女王の名前を借用する傾向が見られる。例えば、男児1位のJohn (John王：1199-1216)、2位のWilliam (William 1世：1066-1087、William 3世：1689-1702)、3位のCharles (Charles 1世：1625-1649)、4位のGeorge (George 1世：1714-1727、George 6世：1936-1952)、5位のJames (James 1世：1603-1625)、そして8位のHenry (Henry 1世 1100-1135、Henry 8世 1509-1547) である³⁾。一方、1880年代における女兒への命名では、1位のMaryと9位のMarie (Mary 1世：1553-1558、Mary 2世：1689-1695)、2位のAnnaと10位のAnnie (Anne：1665-1714)、3位のElizabeth (Elizabeth 1世：1558-1603)、4位のMargaret (Margaret: 1489-1503) などにイギリス歴代女王の名前が借用されている。

ところが現代では大きく様変わりし、男児の場合、WilliamとJoseph、女兒の場合、Emmaのみが共通して見られる以外は、人気のある名前は大きく様変わりしているのである。

表1：1880年と2005年にアメリカ合衆国で新生児につけられた名前のベスト10の比較

男子 1880年	男子 2005年	女子 1880年	女子 2005年
1 John	Jacob	Mary	Emily
2 William	Michael (Hebrew)	Anna	Emma
3 Charles	Joshua	Elizabeth	Madison
4 George	Matthew	Margaret	Abigail
5 James	Ethan	Minnie	Olivia
6 Joseph	Andrew	Emma	Isabella
7 Frank	Daniel	Martha	Hannah
8 Henry	William	Alice	Samantha
9 Thomas	Christopher	Marie	Christina
10 Harry	Joseph	Annie, Sarah	Ashley

3) 6位のJosephはポルトガルの王(1714-1777)の名前として知られている。

エクス 言語文化論集 巻下先生退職記念号

このように、伝統的な名前からの脱却は現代日本だけでなく英語圏の社会にも共通して見られることであり、このことは興味深い一つの社会現象と言えよう。先に1880年代の命名では歴代の国王名が借用される傾向があったと述べたが、実はこれらの名前のほとんどが元々ユダヤ教とキリスト教に深く関わった人物(つまり旧・新約聖書に登場する人物)に由来している(例:聖母 Mary、マリアの母 Anna、ヨハネの母 Elizabeth、アブラハムの妻 Sarah、12使徒の John, James, Thomas、ユダヤ教における四大天使の一人 Michael など)。つまり英語圏での命名にはキリスト教の文化も深く関わっているということだが、このことは2005年の人気名リストで国王名に由来する名前の借用が減ってもキリスト教に所縁の深い名前は依然減っていないという事実から首肯できるであろう(例:2005年の Jacob, Michael, Matthew, Andrew, Joseph)。ただ女子用の名前では、1880年にはキリスト教文化においてイエス・キリスと並ぶ中心人物の Mary、及び彼女に最も近い Anne と Elizabeth が1位から3位までをそれぞれ独占していたが、2005年にはこれらがベスト10からすっかり消えている点は特筆に価しよう。この理由としては、これらの名前があまりにも一般的になりすぎて人々に「飽きられた」可能性が考えられる。

次の表2は、アメリカ合衆国において2000-2005年と1880-1885年に新生児につけられた人気ベスト10に入る名前を示している。表2において年代と性別ごとの名前の数が違う理由は、調査対象にした年代をまたがって同一の名前が存在する場合があるからである。名前そのものに関しては、男児の場合 William、女児の場合 Emma, Sarah が時代を超えて変わらず人気のようである。

名前の語頭子音の「種類」と名前全体の「音節数」について両時代間で比較してみた。まず名前の第1音節の「頭子音」の種類に関して、1880-1885年と2000-2005年の男児名に共通することは、ともにJから始まる名前が3つずつ見られるということである(1880-1885年の James, John, Joseph: 2000-2005年の Jacob, Joseph, Joshua: 更にリスト外の例を挙げれば Jonathan, Jude, Judith など)。実はこのように「J」で始まる名前が男性名に多いのは、これらの名がヘブラ

大高・杉浦：英語のファーストネームに関する考察と英語語彙教育への提言

表2 アメリカ合衆国における 2000-2005 年と 1880-1885 年の人気ベスト 10 の名前
(アルファベット順)

2000 年代				1880 年代			
Boys		Girls		Boys		Girls	
Names	syhb.	Names	syhb.	Names	syhb.	Names	Syhb
Christopher	3	Hannah	2	Charles	1	Clara	2
Taylor	2	Jessica	3	Frank	1	Florence	3
Daniel	3	Madison	3	Thomas	2	Grace	1
Jacob	2	Sarah	2	Harry	2	Bertha	2
Joseph	2	Samantha	3	Henry	2	Mabel	2
Joshua	3	Taylor	2	James	1	Margaret	3
Matthew	2	Emma	2	John	1	Marie	2
Michael	2	Ashley	2	Joseph	2	Martha	2
Nicholas	3	Abigail	3	Robert	2	Mary	2
William	3	Alexis	3	William	3	Minnie	2
Andrew	2	Emily	3	George	2	Rose	1
Anthony	3	Elizabeth	4	Edward	2	Sarah	2
Ethan	2	Isabella	4	平均	1.8	Anna	2
平均	2.5	Olivia	4			Annie	2
		平均	2.9			Emma	2
						Alice	2
						Elizabeth	4
						Ida	2
						平均	2.1

イ人の守護神人ヤハウエ (Yahaweh/Yehowah/Jehovah) を構成要素として出来ているからで、'Yo' はヤハウエを意味するのである (梅田 2000)。Jesus (ヘブライ語では Yeshua) の名も例外でなく、Matthew, Elijah, Isaiah なども語源的にはヤハウエの名を一部受け継いでいる (Matthew の ew, Elijah と Isaiah の ah に注意)。

一方異なる点は、/m/ か /n/ の鼻子音で始まる名前が 1800-1885 年では上位に 1 つも入っていなかったが、2000-2005 年では 3 種類に増えているということが挙

エクス 言語文化論集 巻下先生退職記念号

げられる (Matthew, Michael, Nicholas)。一方、興味深いことに、これとは逆の現象が女兒名には起きている。女兒名において1880-1885年には /m/ から始まる名前が Mabel, Margaret, Marie, Martha, Mary, Minnie とかなり多かったのに対し、2000-2005年では Madison の1種のみで激減しているのである⁴⁾。最後に男女間に見られる差についてもう一つ言及すると、時代を問わず女兒の方が母音で始まる名前が多い傾向にあるということが挙げられる。例えば、Ashley, Abigail, Alexis, Emily, Elizabeth, Isabella, Olivia (以上2000-2005年)、Anna, Annie, Emma, Alice, Elizabeth, Ida (以上1880-1885年)がこの範疇に属し、各時代の全体の3分の1(1880-1885年)から半分近く(2000-2005年)を占めているのである⁵⁾。

次に「音節数」に関して見てみるとは、1880-1885年の男児と女兒の名前が平均でそれぞれ1.8音節、2.1音節だったのに対し、2000-2005年では男児が2.5音節、女兒が平均2.9音節と共に増えている。つまり、英語の名前は性別に拘わらずだんだん多音節化してきているということである。もっとも、これは正称での現象であり、ニックネーム(愛称)では短い音形が依然好まれることに変わりはない(例: Anthony → Tony, Elizabeth → Beth/Betty, etc.)。

2.2 人気名の国別比較

名前の人気というものは、流行りもの同様に、時代によってばかりでなく国や地域によっても左右される。同じ英語圏にあっても国ごとに文化が微妙に異なるからである⁶⁾。下に掲げる表3は、英語を母語とする5カ国における、近年人気の男児

4) ともあれ、英語圏においても日本においても女兒名には鼻音が好まれるという傾向が見てとれるが、これは音象徴という観点から大変興味深いことである。しかしこれが普遍的な現象と言えるかどうかは、もっと多くの言語圏での名前を広く調べてみないことには断定できない。

5) ところで、英語の音節構造において母音(V)で始まるものは「有標」とされているが、なぜか女兒名においては母音で始まるものが比較的多く見られる。この理由は何なのだろうか。

6) 例えば、名前の人気は著名な映画や小説に登場した人物の名前などにも左右される(吉田1990)。

名ベスト5を示している。

表3：国ごとの名前（男性）ベスト5

国	Australia	New Zealand	England	Canada	US
男性	(2005)	(2003)	(2005)	(2003)	(2005)
	Jack	Joshua	Jack	Ethan	Jacob
	James	Jack	Joshua	Joshua	Michael
	Lachlan	Benjamin	Thomas	Matthew	Joshua
	Benjamin	Samuel	James	Ryan	Matthew
	Joshua	Daniel	Oliver	Alexander	Ethan

Joshuaは5カ国どの国においても人気である。因みにこの名は、モーセの死後にユダヤの民を約束の地カナンまで導いたヨシュアにあやかっている。また、Jack（古くはJacobもしくはJohnの愛称として誕生した）はオセアニア圏とイギリスにおいて人気である。これは、イギリス連邦という名の下で政治・文化・経済の面で一つの地域が形成されていることの証であろう。カナダは同じイギリス連邦下にあるが、名前の人気に関しては地理的な理由からアメリカ合衆国のものに近い（EthanとMatthewがカナダとアメリカ合衆国にのみ共通している点に注意）。

次に、女兒の名前についても同様に見てみよう。表4には英語圏5か国の人気名ベスト5が挙げてある。

表4：国ごとの名前（女性）ベスト5

国	Australia	New Zealand	England	Canada	US
女性	(2005)	(2003)	(2005)	(2003)	(2005)
	Olivia	Emma	Jessica	Emily	Emily
	Charlotte	Sophie	Emily	Emma	Emma
	Emily	Ella	Sophie	Madison	Madison
	Ella	Emily	Olivia	Sarah	Abigail
	Jessica	Jessica	Chloe	Hannah	Olivia

エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

女兒の場合、Emily は国を問わず人気があるが、ここでも「イギリス連邦圏」対「北米英語圏」という地理的な図式（差）が見られる。例えば Jessica や Sophie は前者にのみ見られ、Madison は後者にのみ見られる。更には、北米英語圏では上位3種までが同じである（Emily, Emma, Madison）。

3. 調査1：日本人大学生の英語名に関する「知識」の考察

3.1 目的

ここでは、日本人大学生の英語のファーストネームに関する認知度（知識）を調べるためにアンケート調査を行う。それは、現在人気のある主な名前の性別を当てる問題（男性、女性、男女兼用）と主な愛称形（ニックネーム）の正称を答えてもらう問題から成っている。

3.2 調査方法

3.2.1 参加者

日本人大学生（関西学院大学経済学部2年生）84人が被験者として参加した。性別の内訳は男子が60名で女子が24名である。このうち留学経験者や外国人留学生は含まれていない。皆等しく7年の英語学習歴をもつ。

3.2.2 調査材料・調査方法

イギリス、アメリカ合衆国、オーストラリア、ニュージーランド、カナダの5カ国において最も多く使用されている男女の名前（上位10位ずつ）をアルファベット順に並べたリストを作成した。そして各名前が男性用のものか女性用のものか、あるいはまた男女兼用のものかを判断してもらい、所定欄に○を記入してもらった。また、愛称形から正称を当てる問題では、主なものを男性用と女性用から10ずつ選び、答えを書いてもらった（ただしカタカナでの回答を可とした）。サンプルとして使用した愛称は以下に挙げるとおりである（表5）。意図的に、世界の著名人

大高・杉浦：英語のファーストネームに関する考察と英語語彙教育への提言

を通してこれまでにどこかで耳にした可能性の高いものばかりを選んだ。

表5：調査対象とした英語の愛称形とその正称

男性	愛称	正称	女性	愛称	正称
	Bert	Albert/Herbert		Barb	Barbara
	Andy	Andrew		Cathy	Catherine
	Ben	Benjamin		Cindy	Cynthia
	Chris	Christopher		Betty	Elizabeth
	Dan	Daniel		Jackie	Jacqueline
	Don	Donald		Jan	Jane/Janet/Janice
	Joe	Joseph		Jenny	Jennifer
	Mike	Michael		Julia	Juliet
	Dick	Richard		Meg	Margaret
	Bill	William		Nan	Nancy

尚、推測でしか答えられない場合は「分からない」の箇所に○を記入するよう指導し、学生の名前に関する知識がなるべく正確にテスト結果に反映するよう配慮した。

3.3 調査結果

3.3.1 正答率

大学生 84 人における英語名 (56 種) の性別に関する知識の正答率は 58% であった。表 5 で示すように、正答率の高かった名前は 1 位から Emily が 96.4% (女性)、Alexander が 95.2% (男性)、John が 95.2% (男性)、Jessica が 94.0 % (女性) そして Jack が 92.9% (男性) の順であった。

エクス 言語文化論集 巻下先生退職記念号

表6 各名前の性別に関する正答率（上位10位）

順位	ファーストネーム	正答率	順位	ファーストネーム	正答率
1位	Emily	96.4%	6位	Thomas	91.7%
2位	Alexander	95.2%	7位	Ellie	90.5%
3位	John	95.2%	8位	Amy	88.1%
4位	Jessica	94.0%	9位	Emma	88.1%
5位	Jack	92.9%	10位	Sarah	86.9%

逆に、正答率の低かった名前は、表7に示した結果から分かるように、最下位から James が 4.8%（男女兼用）、Georgia が 6.0%（女性）、Madison が 8.3%（女性）、Noah が 11.9%（男性）、そして Ryan が 13.1%（男女兼用）であった。男女兼用の名前に関する知識はほとんどないようである。

表7 各名前の性別に関する正答率（下位10位）

順位	ファーストネーム	正答率	順位	ファーストネーム	正答率
1位	James	4.8%	6位	Paige	15.1%
2位	Georgia	6.0%	7位	Taylor	21.4%
3位	Madison	8.3%	8位	Ethan	21.4%
4位	Noah	11.9%	9位	Erin	21.4%
5位	Ryan	13.1%	10位	Taylor	22.6%

次の表8では名前の性別ごとの正答率が示されている。男性の名前（22種）の正答率は61.0%、女性の名前（22種）の正答率は64.0%、男女兼用の名前（8種）は21.0%であった。ここでも男女兼用の名前に関する知識が男性用・女性用の名前と比べて著しく低いことが分かる。

大高・杉浦：英語のファーストネームに関する考察と英語語彙教育への提言

表8 名前の性別ごとの正答率

順位	性別	正答率
1位	女性	63.7%
2位	男性	60.8%
3位	男女兼用	21.3%

愛称形とその正称に関する知識を問う問題では、下の表9に示すとおり、全体の平均は19.5%しかないことが判明した。男性名ではChris (48%) とMike (61%)、女性名ではNan (63%) を除けば、英語名の愛称形についてはほとんど知られていないと言っても過言ではない。

表9 各愛称形の正答率

男性	愛称 (正称)	正答率	女性	愛称 (正称)	正答率
	Bert (Albert/Herbert)	12%		Barb (Barbara)	21%
	Andy (Andrew)	7%		Cathy (Catherine)	24%
	Ben (Benjamin)	28%		Cindy (Cynthia)	2%
	Chris (Christopher)	48%		Betty (Elizabeth)	15%
	Dan (Daniel)	16%		Jackie (Jacqueline)	2%
	Don (Donald)	14%		Jan (Jane/Janet/Janice)	29%
	Joe (Joseph)	7%		Jenny (Jennifer)	0%
	Mike (Michael)	61%		Julia (Juliet)	24%
	Dick (Richard)	6%		Meg (Margaret)	2%
	Bill (William)	34%		Nan (Nancy)	63%
	平均	22.3%		平均	18.2%

エクス 言語文化論集 卷下先生退職記念号

4. 調査2：日本の英語学習用テキスト・参考書に使用される名前の調査

4.1 目的

ここでは、日本で発行される高校生・大学生を対象とする英語学習用テキストで実際にどのような名前が使われているのかを調査する。そして、ここでの結果を先の人気名トップ10で挙がっていた名前とどのくらいの割合で一致するのを見ることにする。

4.2 調査方法

高校生が使用するテキストと大学生が使用するテキスト（それぞれ3冊ずつ）において、使用されている全例文数に対する、使用されている名前の種類数の割合を計算する。一つの名前がどのくらい頻繁に使用されているかを見たいからである。例えば40種の名前が200の例文中で使用されているならば、1つの名前の使用頻度は平均5.0（回）ということになり、例えば2.0のテキストと比べた場合、前者の方に同じ名前の繰り返し使用が多いということが分かる。つまりこのことは、後者の編集者と比べて、前者の編集者には人名に関する語彙教育への配慮が欠けていることを意味する。

4.3 調査材料

調査するテキストは、多数の大学生用英作文テキストの中から3冊を任意に選んだ（1995, 2000, 2006）。諮らずもこのうちの2006年度版のテキストは2002年度版のリニューアルである。高校生用のテキストも同様にして選び、結果として文科省検定教科書のライティングテキスト（2002）と授業用副教材暗唱例文集（2002）と入試頻出英語問題集（1996）が調査対象となった。

4.4 調査結果

表10は高校・大学用のテキスト（英作文・暗唱例文参考書など）に使用される

大高・杉浦：英語のファーストネームに関する考察と英語語彙教育への提言

例文数に対する名前の種類数の割合を示している。表の右端に示された数値から分かるように、6種類のテキストにおける1つの名前の平均使用率は、2.21であり、1つの名前を約2回使用していることになる。この低い数値から、編集者は多数の文に重複して同じ名前を使用することのないように、名前の種類に多様性をもたせるようにある程度は配慮してテキストを作成していることが伺える。例えばテキスト3では1.52, テキスト5では1.53, テキスト6は1.24である。

しかし、上述のことはすべてのテキストについて言えることではない。例えばテキスト2では数値の結果が5.3と判明したことから、中にはまったく人名教育に配慮していないものも存在することが伺える。テキスト3は、先に述べたようにテキスト2の改訂版だが、旧版の5.3から1.52とだいぶ改善されているのが伺える。これは、このテキストの筆者がなるべく多くの名前を使って同一の名前の繰り返し使用を極力避けようと努力した結果である。

表 10 各テキストにおける1つの名前の平均使用率

対象	出版年	種類	名前の平均使用率
大学生用テキスト1	(1995年出版)	英作文	2.5
大学生用テキスト2	(2002年出版)	英作文	5.3
大学生用テキスト3	(2006年出版)	英作文	1.52
高校生用テキスト4	(1996年出版)	英語標準問題 1100	2.15
高校生用テキスト5	(2002年出版)	暗唱例文集	1.53
高校生用テキスト6	(2003年出版)	ライティング	1.24
		平均	2.21

エクス 言語文化論集 巻下先生退職記念号

表 11 高校・大学のテキスト 6冊に使用されていた名前 (78種)

名前	音節	名前	音節	名前	音節	名前	音節	名前	音節		
Alan	2			<i>George</i>	2	Karen	2	Nick	1	Tommy	2
<i>Alice</i>	2	Chuck	1	Greg	1	Kate	1	Olive	3	Vick	1
Allen	2	Cindy	2	<i>Harry</i>	2	Katy	2	Olivia	4	Walter	2
Andy	2	Colin	2	Helen	2	Ken	1	Pat	1	William	3
Andrew	2	Cyndi	2	Jack	1	Kim	1	Paul	1		
Andy	2	Cynthia	2	Jane	1	Linda	2	Peter	2		
Ann	1	Dick	1	Jeff	1	Lucy	2	Richard	2		
Anthony	3	David	2	Jemmy	2	Madonna	3	Ron	1		
Barbara	3	Deborah	3	Jenny	2	<i>Margaret</i>	3	Sally	2		
Bell	1	Dick	1	Jill	1	Maria	3	Stella	2		
Beth	1	Dorothy	3	Jim	1	Mark	1	Steve	1		
Betty	2	Eddie	2	Jimmy	2	<i>Mary</i>	2	Sue	1		
Bill	1	Emily	3	Joanne	1	Matt	1	Susan	2		
Bob	1	Evan	2	Joan	1	May	1	Susie	2		
Bobbie	2	Fannie	2	Joe	1	Meg	1	Ted	1		
Brenda	2	Fill	1	<i>John</i>	1	Mike	1	Terry	2		
Bruce	1	Frances	2	Judy	2	Miranda	3	Tim	1		
Carol	2	<i>Frank</i>	1	Julia	3	Nancy	2	Tina	2		
Caroline	3	Fred	1	Naomi	3	Tom	1			平均 1.75	
Charlotte	2										

次に、今回の調査に使用したテキストに使われていた名前の中に 1880 年代と 2000 年代にアメリカの新生児につけられた人気の名前があるかどうかを調査した。表 9 にて、太字体になっている名前（そのうちイタリック体は 1880 年代）が該当する名前である。具体的には Alice, Andrew, Anthony, Emily, Frank, George, Harry, John, Margaret, Mary, Olivia と William である。その一致率は 15% にしか過ぎないので、使用頻度を基に単語の選定をするというのであれば、テキストで使用する名前の選択にはもう少し配慮があつてしかるべきなのかもしれない。

次に、アメリカで人気の名前（上位 10）と日本人学習者用に編纂された英語テ

大高・杉浦：英語のファーストネームに関する考察と英語語彙教育への提言

キストで使用されている名前の音節数を比較した。日本の英語テキストに使用されている名前には1音節のものが多くの特徴である。例えば、Ann, Bell, Beth, Bill, Bob, Bruce, Chuck 等などである。平均でも、その平均音節数は2音節に満たない(1.75音節：N.B. すでに言及したように英語圏における1880年代の名前では2音節、2000年代では2.64音節であった)。一方、アメリカで人気の名前トップ10(2000年代)には、総数が少ないとはいえ、一音節のものがまったくない。これは、日本の英語テキストにおいては、学習者に余分な付加を与えないようにするためにできるだけ短い名前が意図的に選択されていることを示唆する。

5. 結論：英語語彙教育の一環として名前を教えることの意義

本稿の冒頭でも述べたように、現在の日本の英語教育では固有名詞としての名前(ファーストネーム)の学習は比較的等閑視されている。繰り返すが、これは教育する側が名前の学習よりも普通名詞や動詞、機能語などの教育を優先しているからである。週に3～4時間という限られた教育時間内で最大の学習効果を望めば、当然このような結果にもなる。しかし、名前に関する知識は有用性において決して低くはない。例えば、電子メールという文字のみのコミュニケーションにおいては、名前を見て相手の性別を判断しなければならない場面は多く、この知識なくしては相手への返事に Mr. と Ms のどちらを使うべきかの判断ができないのである。

本研究で大学生対象に行った英語名に関する知識調査は、結果的に、彼らの知識がさほど高くはないことを示した。男性・女性名に関する正答率が共に60%程度、男女兼用名が20%程度で、愛称形に至っては20%に満たない低い正答率だったのである。一方、日本人の大学生・高校生対象に書かれたテキストの調査からは、ここで使用される名前の種類は必ずしも豊富でない(つまりテキストによっては同じ名前が何度も繰り返し使われている)ということが分かった。これは、名前というものが英語の語彙教育において普通名詞や動詞、副詞、機能語などの語彙ほどには重要な習得対象として位置付けられていないことを示している。

最後に考えてみたいことは、テキストの中で多種類の名前を使用することは学習者にとって実際にどれほど負担になるのだろうかという点である。普通名詞や動詞であれば、音と意味を連結させて長期記憶しなくてはならない。こうするには、普通、かなりの努力が要求される。習った単語の意味をすぐに忘れてしまったことが一度や二度でないことは誰しも経験があろう。一方、名前は、語として「名前である」という以外の意味をもたない。つまり名前の学習は、ほぼ音に関する情報のみを記憶する行為である。よって、さほど負担にはならないと考えられる。結論として、英語の教材ではなるべく多くの名前が使われるべきである。同じ名前の連続使用は教材としてあまりに芸がないからである。これは、フォニックスの知識が確立している学習者を対象とする高校以降の英語教育では特に言えることである。よって、学習者による受動的学習 (Krashen & Scarcella 1982) を期待して、テキスト製作者はなるべく多くの名前を提示してやるべきなのである⁷⁾。

日本の英語語彙学習において、中学校・高等学校の6年間を通じて学校の英語教科書を学習した場合、語彙の面でどの程度の実用性が得られるかという調査では日本語の英語語彙学習における「日常生活用語の不足」が指摘されている(中条、長谷川、竹蓋 1993)。日本において英語の名前は、この「日常生活用語」の部類には入らないが、英語圏ではそうではない。彼らにとって英語名は最も身近な「日常生活用語」の一つと言える。ちなみに、英語圏で発行されるテキストでは、初期レベルの学習者用にファーストネームやファミリーネームの読み方を練習する場面が組み込まれていることが多い (Expressions, 2003)。それほど名前というものは彼らには身近な存在なのである。このように、英語の名前教育は英語を母国語として学ぶか外国語として学ぶかの違いによって重要度が異なりうるわけだが、今後日本を

7) さらに言えば、授業で名前そのものを教育材料として取り上げ、命名の背景にある歴史や文化を教えるということも可能である。例えば、英語圏の文化には愛称形が存在するが、それを呼称として使えるのはあくまで相手がそれを望む場合に限られるというマナーに関する知識や、MacDonald や Macarthur などの語頭の Mac はスコットランド語で「息子」を意味し、Elizabeth, Immanuel, Elijah, Michael, Samuel, Daniel, Gabriel の中にある形態素 'el' はヘブライ語で「力」を意味するなどの語源に関する知識、あるいはまた本稿でも言及したようなキリスト教と名前に関する知識などの教授が教育目標として挙げられよう。

大高・杉浦：英語のファーストネームに関する考察と英語語彙教育への提言

含む世界がより一層英語を通してグローバル化するであろうことを考慮すると、日本の英語教育は名前の教育にも目を向ける必要があるのではなかろうか。

参考文献

- Baby Name Guide. (2002). *Unisex baby names*. Retrieved November, 05, 2006, from <http://www.babynamenameguide.com/categoryunisex.asp?>
- Nunan, D. & Beatty, K. (2003). *Expressions: Meaningful English communication*. Boston: Heinle/Thomson Learning
- Most popular given names. (2006, Nov.). In Wikipedia. The Free Encyclopedia. Retrieved November, 05, 2006, from http://en.wikipedia.org/wiki/Most_popular_given_names
- Krashen & Scarcella (eds.) (1982). *Child-Adults Differences in Second Language Acquisition*, Newbery House.
- List of the most popular names in the 1880s in the United States. (2006, Nov.) . In Wikipedia. The Free Encyclopedia. Retrieved November, 05, 2006, from http://en.wikipedia.org/wiki/List_of_the_most_popular_names_in_the_1880s_in_the_United_States
- List of the most popular names in the 2000s in the United States. (2006, Nov.) . In Wikipedia, The Free Encyclopedia. Retrieved November, 05, 2006, from http://en.wikipedia.org/wiki/Most_popular_given_names_in_the_1880s_in_the_United_States
- イギリス歴代国王『データの玉手箱』2006年12月18日(月) URL : <http://www.kcat.zaq.ne.jp/kimutake/database/bunreki/englandk.html>
- 梅田 修 (2000). 『ヨーロッパ人名語源辞典』大修館書店
- 中条清美、長谷川修治、竹蓋幸生 (1993). 「日米英語教科書の比較研究から」、『現代英語教育』第29号. 14-16.
- 吉田正俊 (1990). 「イギリスの名づけ」、『月刊言語』第19号. No. 3, 34-37.